

文献案内

三原大史「明応二年御陣図」からみた中世後期の河内国」〔都市文化研究〕第三号、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、二〇二三年三月

明応二年（一四九三）、足利義材と河内守護畠山政長らの軍勢は、畠山基家を討伐する目的で河内国へ遠征するものの、明応の政変により形勢が逆転し、敗北する。本論文は、この一連の戦いである「正覚寺の戦い」の布陣状況を描いたとされる「明応二年御陣図」（奈良市福智院家に伝来し、現在は京都市在住の個人が所蔵する）を検討したものである。

はじめに、同時代の日記類から正覚寺の戦いの経過を概観している。その作業によって、現在の藤井寺市・羽曳野市・松原市が主戦場となっていることがわかり、これらの地域が詳細に記される本図が、正覚寺の戦いを意識して作成されたことが確認される。次に、本図に記された地名の翻刻及び現在地比定を行ったうえで、中世後期河内国の交通路について考察が展開される。具体的には、本図の川を示す黒線と、道を示す朱線を検討し、川・道の現在地比定を行っている。また、川を跨ぐように描かれる長方形の記号に注目し、これらが渡し場や渡舟を表し、河内国北部では主に川船が大和川水系に関わる交通を担っていた可能性を指摘する。

以上の検討を踏まえ、最後に本図の性格を三点にまとめている。一点目は、作成者についてであり、『尋尊大僧正記』に登場する地名との一致率などから、伝来のとおり尋尊とする。二点目は、情報源についてである。本図の表記、描写からは、河内北部の情報量が貧弱であることが窺え、十五世紀末における、主に南部の交通を介した情報の伝わり方を表現していると指摘する。最後の三点目としては、本図が正覚寺の戦いだけではなく、これまでの両畠山氏の抗争も含めて書き表した絵図である可能性を提示している。

中世後期の河内国を描いた本図の地名、川、道の細かな現地比定がなされ、特に、北部と南部で、交通の様相や情報量の差を読み取れることが指摘されたのは重要な成果である。河内国に関してだけでなく、大和国との関係・交通を考えていくうえでも必読の論文となるだろう。今後、他地域との比較、地形の復元等も加味した、本図の更なる解明を期待したい。

（鈴木沙織）

陳韻如（前田佳那訳）「宋帝后画像について―東アジア中世の帝王画像における宗教性と世俗性」〔板倉聖哲・塚本麿充編「コレクシヨンとアーカイヴ」〕勉誠出版、二〇二三年月

東京大学東洋文化研究所の『中国絵画総合図録』三編完結と、歴代担当者の一人、小川裕充氏追悼を重ね合わせた論文集の一編。小川氏には「北宋時代の神御殿と宋太祖・仁宗坐像について」（『国華』一二五五、二〇〇〇年）があり、本論文はその論点も継承する。神御とは皇帝の肖像画である。台北国立故宫博物院には宋代帝王画像十六軸・皇后画像十一軸が所蔵される。清の宮廷に集められたが、画風や成立背景は個々に検討を要する。

まず、ほぼ同一の図様を示す南宋帝王像六幅について、画風から制作年代を定める。始点として、理宗・寧宗両坐像の彩色・紋様・面貌表現などの細部を比較し、寧宗像を後代の再制作として、他像も南宋前中期・後期、南宋を下る制作と識別して基準を立てる。さらに北宋帝王像に遡って検討するが、南宋に新たに制作された画像が含まれ、姿態にも幅がある。紅色袍服の坐像六幅を比較し、とくに哲宗・徽宗二像は徽宗朝制作と推定する。また紅色でない三幅の課題に言及し、宣祖・宣皇后両坐像は他と異なる図像と確認する。

ついで宋代帝后像の類型の淵源を探る。先行して立像が流行していた兆候やその機能、坐像定着の背景として特に晩唐五代の生祠信仰に注目する。また正面像とされず、扱手札で描かれるという大きな論点の下、儀礼との関わりを検討する。帝王像は最高級の礼服ではなく常服の履袍だが、向い合せで対となる皇后像は最高級の褙服である。朝廷行事において皇后はほぼ褙服を着し、皇帝は儀礼の途中で着替えることがある点に留意される。帝后神御は必ずしも同じ殿閣で献礼を受けず、対で祀る状況は再検討を要す。咸平年間（九九八―一〇〇三）以降、神御への朝謁が皇帝の行事で踏襲され、神御に対し在位中の皇帝が百官の朝謁を受けるのと同じ扱いがなされ、神御は生前の朝謁の礼法にかなう常服の坐像が定型となったと推測する。

本論で論じられた肖像画は「故宫典藏資料検索」から画像閲覧・ダウンロード、過半については「Open Data 專區」から全図 300dpi の tiff 画像を利用でき、細部に関する指摘など、論旨をたどることができる。（藤原重雄）